

普段着の神々

財部 洋 (江東区)

平成20年7月28日午前11時。銀座4丁目交差点すぐ側の大黒屋前に、息子の友達二人待つ。今日は彼らの友達の親父（私）の贅沢な時間のお手伝い。勿論飯付きバイト料が狙いだが、それでも、現れた友達の親父におべんちゃらを言い、赤帽の軽トラが来ると体育会系の身体に似合わないほど優しく、慎重に狭いエレベーターに荷物を運び込む。荷物はこれから陽の目を見る木彫り達個展『普段着の神々』——。

平成14年に患った心筋梗塞のあと、静養のため富士にある小さな別荘でマイナス10℃近い冷気の中、外に出ることもできず暇に飽かせて血だらけになりながら、誰に教わったでもなく、何となく小枝に彫り始めた顔（図1）。どういうわけか鉛筆の太さほどの顔に通し番号と日付を

書き込み溜めておいたところ、小枝はいつしか1メートルを超す様な大作にもなり、その数も200を超えるようになった。そうすると冷やかしの悪友に嘲し立てられ、思いもしない個展の開催が決まった。「お披露目の個展だったらやらん方がいい。値札のない作品を飾るなど、来る人にかえて失礼だ」などと脅され、勝手に法外な値段をつけ、恐ろしいやら、恥ずかしいやら。それでも女房のプロまがいのライティングなどもあり、なんとか開催の運びとなった（図2）。

通りすがりの人、いつまでもいた見ず知らずの人、面白い個展やってくるよと言われ物見遊山でやって来た人、プロの彫刻家、蒐集家等、500人を超える人たちが来展し、そしてそれらの人たちとの熱い会話に時の

立つのを忘れた。なにより毎日終わってから有楽町のガード下で酎ハイとモツ焼き片手にお疲れさん！快感とはこういうことか、というほどの楽しい1週間であった。

この個展で出展した144番目の作品は、この年の秋に開催された東京都美術館の新院展に出展し、驚いたことに新人賞をいただいた（図3）。さらに翌年落選を覚悟で出展した新構造展では入選を頂いた。もともと芸術に疎く誘われて上野の美術館に行くことがあっても、そこに飾られた作品群を前に、私とは別世界のことにあまり関心もなく、またその実このような檜舞台に出れる人に対して羨ましくもあった。絵も描けない私は、富士山で朽ちている木や、安いSPF材（北米産針葉樹）をボンドで繋ぎ合わせた寄木を前に一気に彫り上げる。そんな私の素人作品が、東京都美術館の壁に飾られた時の高揚感は今でも忘れることのない素晴らしい経験であった。こうなると、木を彫ることに夢中になり、休日はもとより診療の合間にまでノミを手にして500羅漢に挑戦したり、富士の別荘で「裏庭の展覧会」（図4）を開催したりしながら、平成22年、銀座のギャラリー悠玄で全館を貸り切って2回目の個展「普段着の神々Ⅱ」（図5）を開催した。この時も

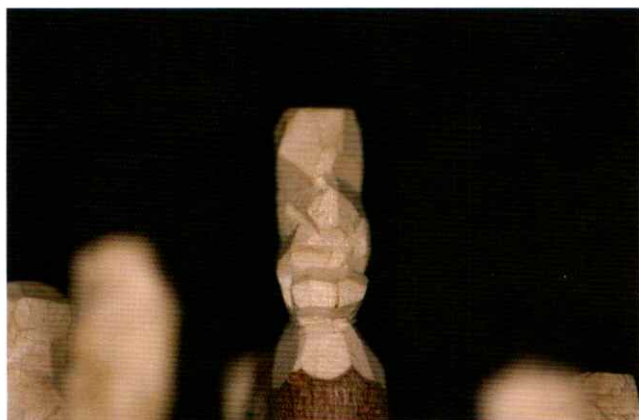


図1 最初に彫った木彫り Op.1



図2 銀座4丁目「大黒屋」ギャラリー



図3 東京都美術館 Op.144



図4 富士の別荘にて Op.101
朝霧のかかる自然の中での展覧会



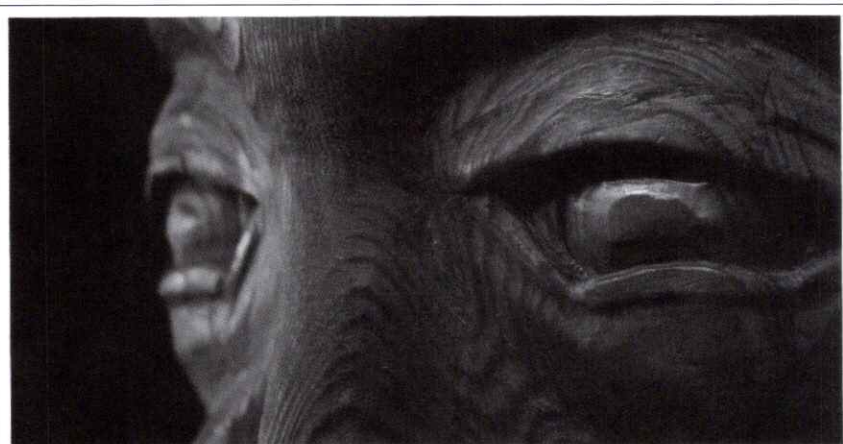
ブログ
普段着の神々



YouTube
普段着の神々



YouTube
普段着の神々 II



普段着の神々 II
賤部 洋木彫展
TAKARABE HIROSHI
2010 9/9(木)-12(日) 12:00-19:00(最終日は17:00まで)

ギャラリー窓玄
東京都中央区銀座 6-11-17 TEL 03-5572-0505
東京メトロ丸の内線 銀座駅 徒歩5分
JR丸の内線 銀座駅 徒歩5分



図5 「普段着の神々 II」 ポスター

前回同様毎日多くの人に来展いただき贅沢な時間を過ごさせていただいた。その後も作品は増え続けたが、平成27年1,007作品目で以降ほとんど彫ることができなくなった。

実は、この年から審査員をやらせていただいた。もともと不器用な私は、同時にいくつものことをこなしていくことができず、4年間その仕事に集中した。審査員が終わって再び木彫りを始めるべく、ノミを取っ

た。しかし、どうにも顔が彫り出せない。この4年間で、普段着の神々は私の中から居なくなった。自信を無くしかけたが、ブログとYouTubeの「普段着の神々」を何度も見返してみた。彫刻に燃えていた頃の自分がいた。今一度、「普段着の神々Ⅲ」を目指し、彫り始めたが、今度は自分が臨床50年の節目にいることに気づき、区切りとして本を書くことを思い立った。自分の臨

床とその根底に流れる哲学とも言えるバックグラウンドを本にしようとして、また木彫りから遠ざかった。

この本に関しては2度ほどしか面識のない元日本人類学会会長・日本大学名誉教授で「日本人の歯とそのルーツ」の著者、金澤英作先生に図の引用の許諾を頂くついでに失礼にも内容見ていただきたい旨のメールを送ったところ10万字に及ぶ原稿を読了され、私のYouTube「普段着の神々」で木彫りまでご覧いただき、次の様に推薦文を書いていただいた。

『「咬耗と人類生物学的現象」を原稿の段階で読ませていただきました。壮大な「財部ワールド」に魅了されました。お母上の治療経験に始まり、多数の症例をこなしながら得られた知見と、それを裏付ける生物学、人類学、進化学、工学など広範囲な知識を合体させた先生の理論は、ある意味では狭い歯科補綴学という技術的な分野の中では、とびぬけてスケールの大きい理論であることがよくわかりました。全体を通して、先生ご自身の自叙伝的な内容になっているようにも思われますし、後に続く歯科医師への警鐘も感じられました。(中略) シンメトリー・アシンメトリーにつきましても、顔

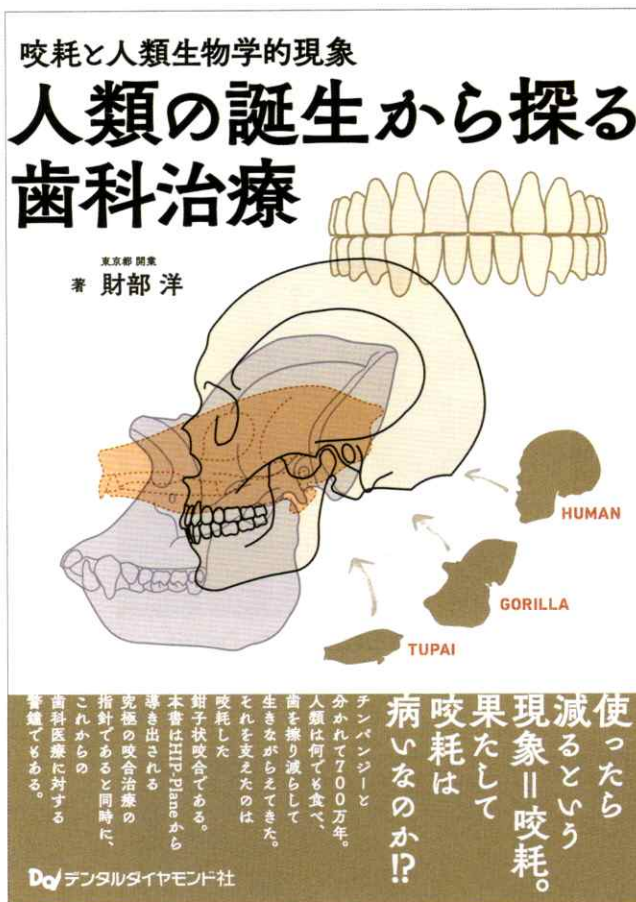


図6 人類の誕生から探る歯科治療 (デンタルダイヤモンド社)

の話、生物の話、興味深く拝読しました。財部先生は人や神々の顔面の木彫を趣味とされており、その作品はアマチュアの域を超えて芸術家レベルに達していると思います。論文の中に顔のシンメトリーについて、建築学や生物学を引用しながらの分析的な記述がありますが、これが異常なほど詳しく書かれているので不思議に思っていました。その背景には先生の顔面や頭部に対する科学から芸術までを貫通する見方があるのだと確信しました。

人類生物学の深い考察に基づいた先生の研究遍歴は大変興味深く、時々挿入されるエピソードとともに、論文というよりは読み物としての面白さが随所にあり、楽しみながら、時に笑いながら読むことができます。歯科の出版物はほとんどが技術的な内容になりますが、この度の先生の

本はそれを超えた、広い意味での学問の楽しさ、文化の豊かさを感じられる作品になっていると思います。多くの歯科関係者にこの本が読まれることを願っています。』

勿体ないことである。この本は、デンタルダイヤモンド社より本年4月に出版された(図6)。

後のない私は、不器用と言ってはいられない。忘れかけていたノミの感触を思い出しながら、また彫り始めた。

近い将来「普段着の神々Ⅲ」を開催し、先生方に案内を送るためにも、初心に戻って精進することを誓った。

普段着の神々

父が53で逝き、その53歳という若い年に、大病を患い、川を渡りかけました。父に呼ばれたものと思いました。どうにか娑婆に戻って、ある日木っ端から顔を彫り出しました。錆びたノミを研ぎ、子供達の彫刻刀で、血だらけになりながら小枝から大きな木々へ。以来朽ちたそれらは私を彫れと上目を使い、神の形で夢にも出ます。

今分かりました。やり残しのある私は、川の手前で父に戻されたのです。やり残しは神々を彫り出すこと。神々は父で母で、妻や子で、先祖で未来。

山や川や風や時の流れ、光と影

恋し、泪し、笑い、酔い、人に喜ぶ
どこにでもある風景
どこにでもいる神々…